

宋元版禪籍研究(九)

——石林和尚語錄・鏡堂和尚語錄——

椎 名 宏 雄

一

宋元版の禪籍類は、現在約一二〇種が各国に遺存している。それは、現存する宋元版の仏典全体の中でもかなりの比重を占めると思われ、今日、質量ともにきわめて貴重な仏教文獻の遺品となっている。ところで、この一二〇種あまりの文獻は、各テキストの本文そのものについては、後代の刊行本によつてほとんど見られるのである。たとえば、『景德伝燈錄』や『宗鏡錄』は宋代以後のほとんどの大藏經本や単行書として、『雲門広録』は叢書『古尊宿語錄』所収書や単行書として、『玄沙広録』や『仏法大明録』は単行書としてのみ、それぞれみられるのである。

ところが一方、右のような後代のテキストがまったく存在せず、宋元版だけが現存唯一無二という禪籍が、一二〇余種の中に四種みられる。それは、東福寺に現存する宋版『仏祖

宋派図』(重文)、もと北平図書館所蔵の元版『別岸和尚語錄』(現蔵者不詳)、お茶の水図書館成實堂文庫所蔵の元版『石林和尚語錄』、天理図書館所蔵の元版『鏡堂和尚語錄』、の四種である。これらの禪籍は異本すら存在せず、文字どおり天下唯一本であるから、その内容は注目に価する。にもかかわらず、いずれもこれまでにくわしい紹介をみない。ここでは、後者の二点を紹介したい。

もちろん、これら二種の禪籍は禪文獻の上からみて、広く禅宗史の上に大きく功献する文獻資料というほどのものではない。しかし、細かな点では多くの新資料を含み、また、古版禪籍の文獻研究にとって有益な事例を提供してくれる。

偶然ではあるが、これら二種の禪籍の間には、撰者と序跋等の撰者の關係をみると、禅宗の法系譜の上で密接な關係にある人が多い。そこで、いまこれらの關係者の法系譜を示しておこう。

〈第一冊―上巻―〉

- | | | | |
|-----|---------------|----------------|-----|
| (1) | 初住安吉州上方禪寺語錄 | 參學可寧・清徹編 | 5紙 |
| (2) | 思溪法寶資福禪寺語錄 | 侍者師契・弥彰・惟標編 | 7〃 |
| (3) | 隆興府黃龜山崇恩禪寺語錄 | 侍者道濟・致純・覚円・処林編 | 13〃 |
| (4) | 平江府承天能仁禪寺語錄 | 侍者自模・介然・紹安編 | 6〃 |
| (5) | 臨安府淨慈報恩光孝禪寺語錄 | 侍者道勤・戒澄編 | 13〃 |
| (6) | 法語(5篇) | 侍者有涯・円月編 | 3〃 |
| (7) | 讚仏祖(15首) | | 3〃 |
| (8) | 自讚(10首) | | 2〃 |

〈第二冊―下巻―〉

- | | | | |
|------|-----------------------|-------|-----|
| (9) | 黃竜告香普説(3篇) | 參學普応編 | 6〃 |
| (10) | 小參(31篇) | 侍者普応編 | 8〃 |
| (11) | 拈古(39則) | 侍者徳海編 | 9〃 |
| (12) | 頌古(37則) | 侍者景雲編 | 8〃 |
| (13) | 偈頌(86首) | | 12〃 |
| (14) | 仏事(15首) | | 4〃 |
| (15) | 序跋(13篇) | | 4〃 |
| (16) | 行実 華州雲台觀顔汝勲撰 | | 2〃 |
| (17) | 刊記「歲在戊子(一二八八)小師慧垢命工刊」 | | 2〃 |
| (18) | 跋 甲申(一二八四)仲夏、雪巖撰 | | 2〃 |

まず、本書の刊行年時を明確にしておこう。右に示したよ

うに、(17)の刊記に「戊子」とある年時を知る鍵は、(18)の雪巖祖欽(*一二八七)による跋文である。この文は雪巖の語録にはみられぬ新資料であるから、つぎに全文を示そう。

一 癸卯婁拜塔前、畢竟無人是酌伝。此天目老師、以破沙盆、任重自己開豁後昆正眼之句。五十年後、果有壞家子、等閑拈起、懸空一撲、直同大地平沈。且道、以何為驗。水落石頭出、枯淵草木香。 甲申仲夏 友人雪巖敬跋

右の跋が書かれた「甲申」は、雪巖の寂年からみて一二八四年でなくてはならない。したがって、さきの「戊子」は一二八八年、つまり元代世祖の至元二五年であり、おそらくこの年に本版は雪巖の跋を付して刊行されたのであろう。ちなみに、本版は版心の下部は破損が多く、刻工名はみいだせない。また右の跋によれば、石林は雪巖と友人関係にあった。

次に、雲台觀顔汝勲が撰した石林の行実に注目しよう。この一文も新出資料である。撰者の顔汝勲のくわしい伝は不詳であるが、石林とは二〇年来の知己であり、石林の法嗣である処林の要請でこの行実を著している。文はかなりの長文で、石林の伝をくわしく伝える。

ところで、従来、石林の伝記に関する根本資料には、『淨慈寺志』巻一に鄧文原が撰した塔銘(一二三八撰)が収録されていた。そこでこの行実と塔銘を比較すると、後者は前者を抄出した略文なる関係にあることが判明したのである。一般

に、禪門語録は既成の塔銘などを収録するものが少なくないが、石林の場合は既刊の語録に含まれていた行実に基づき、新たに塔銘が作られたという珍しい事例が知られる。

さて、語録の本文内容は、前掲のように大勢の侍者等によって集められた五処の語句を中心とするが、とりわけさいごの浄慈寺語録が質量ともに勝れている。また、法語・小参・拈古・頌古・偈頌・序跋などが別出されて多くの作品を収め、石林は詩文の才にもたけていたことが知られる。

また、「黄竜告香普説」三篇が別出されているが、序跋の項目中には「跋告香普説」と「跋普説藁卷」という二文が収められ、その内容から、この「黄竜告香普説」のみはもともと別行されていたことが推察される点で注目される。ともあれ、全五処二四年間の語録は、質量ともにすぐれた本格的な語録であり、元代初期における五山住持の力量を知らしめる好箇の文献資料といえよう。

三

『鏡堂和尚語録』三冊は天理図書館に所蔵され、『天理図書館稀書目録』漢籍之部第三、に書誌的な解題がみられる。

しかし、撰者の鏡堂と編者の守端を、ともに宋代としている。また、『新纂禅籍目録』では撰者を鏡堂、円と記載しながら、これに擬議を呈している。このように、本書は天下一本の稀

書でありながら、撰者すらいまだ明確になされていない。

結論からいえば、本語録の撰者は、『増集続伝燈録』巻六に方山文宝の法嗣として所収される嘉興天寧鏡堂古禅師、その人にほかならない。なぜならば、ここに収録される三つの上堂語句は、天理本語録中の「杭州大覚正等禅寺語録」に二点、「嘉興天寧禅寺語録」に二点、がそれぞれみいだされるからである。字句は完全に一致し、元版語録を忠実に引いていることがわかる。さきの石林の語句についても同様であり、これは大慧派の南石文秀によって編集された『増集続伝燈録』(二四一七)の資料的価値を知らしめる事例である。

鏡堂古については、伝記は知られず、本語録からも完全に諱がわからないのは遺憾であるが、系譜の上では前掲の地位にある元末の人である。ちなみに、『禅籍目録』が記載する鏡堂、円、(二二四四～一三〇六)は、来朝して鎌倉建長寺・円覚寺、京都建仁寺等に歴任した著名な禅匠であるが、けっして本語録の撰者ではない。

さて、本書も小型の精刻版であり、有界一〇行二〇字の版式をもつ三冊本であるが、他に知られぬ多くの跋文を付載する点に外面的な特徴がある。全体の構成内容を順に示そう。

〈第一冊〉

- | | | |
|------------------|----------|-----|
| (1) 初住杭州大覚正等禅寺語録 | 法嗣守端等編 | 15紙 |
| (2) 次住台州浮山鴻福禅寺語録 | 門人志度・祖華編 | 7紙 |

〈第二冊〉

(3) 次住嘉興天寧禪寺語錄 門人元吉・福濟編

(4) 刊記「長汀胡庭鉉刊」

(5) 贊 (3首+x)

(6) 偈頌 (44首+x)

11紙 (1紙欠)

9紙

〈第三冊〉

(7) 題 戊寅（一三三八）冬 東海暮前妙道撰

(8) 跋 至正丁未（一三六七） 天童比丘唯一撰

(9) 跋 玉堂散客剛中陳孚撰

(10) 擬寒山詩（100首）

(11) 跋 大德癸卯（一三〇二）冬 寒巖德海撰

(12) 跋 未（一三〇七？） 雲外庵淨圭撰

(13) 跋 至大戊申（一三〇八） 清茂撰

(14) 跋 至大三（一三一〇）九月 南屏山人元熙撰

(15) 跋 元統甲戌（一三三四） 空明道者趙孟貫撰

(16) 刊記「鄞鼎宝慶寺住持參学比丘□心施財鋟梓

流通」

6紙

1〃

8〃

3〃

2紙

その他、第一冊末の補紙には「明応五丙辰（一四九六）三月

初六 於怡雲南軒下句点了 守懌暮齡五十三」の朱書識語が

みられ、「善慧軒」「洒竹文庫」の旧蔵印が存する。守懌はお

そらく臨済宗東福寺派の自悦守懌であり、東福寺善慧軒の旧

蔵書と思われる。

右に示したように、本語録は一紙を欠くものの、鏡堂が開堂した三処の語録を中心とした古版である。ただし、二つの刊記と八つの題・跋が存在し、第三冊中には「擬寒山詩」がその間に置かれるなど、開版に関する複雑な過程を示している。刊記には年記がなく、題・跋によって刊行時期を知るのはかはない。八篇の撰者のうち、陳孚・浄圭・趙孟貫の三名については不詳であるが、他の五名はさきに掲げた法系譜上のような関係にある。八篇とも比較的短い墨書体の新出資料であるから、以下、順に従って翻刻しておく。

(7) 瓶盤釵釧、同是一金、智慧愚痴、通是一性。說法者貴在蕩除知見、脱略窠臼。松山下子孫、洞明要旨、觀其提唱、古今各々超邁、寧可碎身。若微塵終不暗、留衆生眼、鏡堂得之矣。 戊寅冬良月望日

東海暮前 妙道題 圖 圖

(8) 鏡堂和尚、操履孤高、機鋒峭峻、有陳尊宿之遺風。三坐道場、以無說之說、恢揚從上宗乘、其諸高弟、以無聞之聞、編成巨帙。直得、薛荔椿春劫外、莧菜根遍界流芳。如斯展演、理事全彰、貶上眉毛、白雲万里。 至正丁未良月既望 天童比丘唯一 拜書 圖 圖

(9) 余自幼至壯、出入儒林、及遊禪苑、叩諸尊宿、未嘗見有如吾鏡堂師、超邁卓絕。今觀此錄、字々句句々々、如夜光防壁。今人重□、遂作短□一章、題于卷背云。西湖天竺々々、萬須一鏡浄、旁有古招提、微風度清馨。卓哉彼上人、胸次湛若鏡、便以鏡石

堂、天光淡孤暎。相逢百尺樓、面目水玉瑩、出示詩一編、烟雲湧清興。更擬寒山子、古偈雜幽咏、恭惟雞足山、伽梨伝見性。拈花破顏時、一語亦為刺、末法吁可憎、□教在角勝。今日知即目、聆□独也正、嗽々喧□乘、一鶴喚清勅。我本章句儒、每坐綺語病、何時一枝節、再度松下徑。喚起嶺南能、為鏡作明証、一喚湖水空、鏡堂從法竟。

玉堂散客剛中陳孚拜手

(11)是過量人、道得過量句、一毛吞尽四大海、順水流舟、逆風把施、總由鏡堂藏主。 大德癸卯冬 寒巖德海書 圖

(12)咸謂鏡堂妙用無双、拈寒山題崖、秃筆、作拾得掃帚、東掃西掃、仏祖掩光、誰知尽是引人。入草不得、無過此卷、為証德。未重陽後十日

雲外菴淨圭書 圖

(13)咸音王已前、有語非于舌、相違過量人、好是明々說。獅子筋作琴、衆音忽銷歇、撓開領上雲、放出天辺月。至大戊申秋仲清茂觀

(14)脱去葉藻流麗、而就古淡渾幽、惟有道者能之、古今擬寒山、知幾猶擬陶、卒不能陶。惟法燈似之、天台古鏡堂、生寒・拾示跡処、刻意擬寒山百首、駸々乎寒山矣。其格外提唱偈語、言發非声、又豈可作擬寒山。看闕訖題帙末。至大三年九月初八日 南屏山人元照 圖

(15)元統甲戌良月吉辰、鏡堂禪師來主秀之甲刹、暇日垂訪出、示詩文一編。觀其擬寒山百首、冲譎自然、不仮雕琢、皆警世拔俗之

宋元版禪籍研究(九)(椎名)

辭。蓋其清夜、禪寂之暇、肺腑流出、其言近其旨遠哉、發懲創動合道機。非若騷人□士、撚髭宜搜、而後得者、寒山復起無以尚之。其提唱諸篇、或竜吟虎嘯、或雷厲風飛、滔々乎長江大河、粲々乎郁珠和璧。此又非寒山所能擬者、清明在躬、志氣如神、師実有焉。

空明道者趙孟、敬書

右の八篇のうち、(7)~(9)は元末の作、(11)~(15)はより古い撰述である。そして、古い五篇はみな鏡堂の「擬寒山詩」に対する讃辭、新しい三篇は語録に対する閑説、という相違点が指摘できる。こうした跋文類の撰述年時と内容などから、さういふに現存する元版語録の成立過程を簡条書きにしておく。

一、鏡堂の生前、「擬寒山詩」百首は(11)~(15)の讃辭を付した一書として成立していた。或いは刊行されたかもしれない。

二、鏡堂の寂後、生前三処の語録が編集され、(7)の妙道による至元四年(一三三八)の跋を付して刊行された。(4)の刊記はその時のものであろう。

三、至正二七年(一三六七)以後、右の語録に「擬寒山詩」とその讃辭類を合収し、(8)(9)の跋を付して刊行された。この時の刊記が(6)であり、開版はおそらく四明天童山の近辺であった。これが現存する元版の天理本にほかならない。

△キーワード▽ 宋元版禪籍、石林和尚語録、鏡堂和尚語録

(駒沢大學講師)